



# UiPath 製品の バージョンアップガイド - v2019.10 Studio/Robot編

---

2020年03月  
UiPath 株式会社

# 目次

- 前提
- バージョンアップの手順
- バージョンアップ切り戻しの手順
- よくある質問
- 参考資料



前提

本書の対象者と目的は、以下のとおりです。

## 対象者

- これからバージョンアップを検討している企業、導入支援を行うパートナー企業の方
- UiPath のバージョンアップの計画を検討するシステム企画の方
- UiPath の Studio/Robot 環境をセットアップする管理者の方/作業を実際に実行される方

## 目的

- UiPath 製品のバージョンアップをする際の正しい手順を理解する
- バージョンアップに必要な準備と実施内容を理解し、計画を立てることができる
- バージョンアップ手順を作成し、実行することができる

なお本書をご覧になる前に、“バージョンアップ計画の立て方”の文書をお読みください。

# 本書の対象範囲

本説明では、Robot (Attended/Unattended) 及び Studio の任意のバージョンから v2019.10 へのバージョンアップが対象となります。Orchestrator のバージョンアップは、“Orchestrator Version UP Guide” の文書をご参照ください。

対象製品	バージョン		本書の対象範囲に含まれるか？
	バージョンアップ前	バージョンアップ後	
Robot / Studio	任意のバージョン	v2019.10	含まれる
Orchestrator	任意のバージョン	v2019.10	含まれない バージョンアップガイド _Orchestrator編 でご説明



バージョンアップの手順

# バージョンアップの順序について

弊社製品のバージョンアップは、次の順でご実施頂くことを強く推奨します。  
詳細は、“バージョンアップ計画の立て方”の文書をご確認ください。

1. Orchestrator をバージョンアップ
2. Robot をバージョンアップ
3. Studio をバージョンアップ

# ハードウェア/ソフトウェア要件の確認

バージョンアップによって、要件が変更になっている可能性があります。必ずホームページで最新のハードウェア要件及びソフトウェア要件をご確認ください。特に v2019.10 は、.Net Framework 4.6.1 (最小)が必須となる点にご注意ください。

	チェック項目	v2019.10 での主な要件の変更点
ハードウェア要件	CPU	参考資料の v2019.10 ハードウェア要件 、 ソフトウェア要件をご参考ください。
	RAM	
ソフトウェア要件	Windows OS	4.6.1 (最小)が必須
	.Net Framework	



# バージョンアップ作業全体の流れ

バージョンアップ作業の流れは、以下ようになります。

1. バックアップ
2. アクティビティパッケージ退避
3. 設定ファイル退避
4. バージョンアップ実行
5. アクティビティパッケージ再配置
6. 設定書き戻し
7. 動作確認

# 各バージョンの製品のインストールディレクトリ

製品のインストールディレクトリは、Windows の bitness (x86/x64) と製品のバージョンにより異なります。

Windows OS bitness	製品バージョン	<製品のインストールディレクトリ> のパス
32bit (x86)	v2016.2	%ProgramFiles%\UiPath Studio
	v2017.1	%ProgramFiles%\UiPath Platform
	v2018.1 以降	%ProgramFiles%\UiPath\Studio
64bit (x64)	v2016.2	%ProgramFiles(x86)%\UiPath Studio
	v2017.1	%ProgramFiles(x86)%\UiPath Platform
	v2018.1 以降	%ProgramFiles(x86)%\UiPath\Studio

# 退避と再配置が必要なファイル・フォルダ

前バージョンの製品に同梱のアクティビティパッケージと各種設定ファイルです。

項目	説明	ファイル・フォルダの場所	バージョンアップ後のアクション
前バージョンの製品に同梱のアクティビティパッケージ	<ul style="list-style-type: none"><li>NW接続がある端末では自動でダウンロードされるため必須ではないが、ローカルに配置した方が展開処理が高速になるため再配置を推奨。</li><li>NW接続がない端末には、既存WFの安定稼働のため、新バージョンのインストールディレクトリ配下に配置が必須。</li><li>なお v2018.3 からのバージョンアップ時には既存のパッケージは削除されず保持される動作となるため、この作業は不要。</li></ul>	<p>&lt;製品のインストールディレクトリ&gt; ¥Packages¥*.nupkg 例: UiPath.Excel.Activities.*.nupkg, UiPath.Mail.Activities.*.nupkg など</p> <p>注: v2018.2以前のバージョンに同梱の Core アクティビティ (UiPath.Core.Activities.*.nupkg) に限っては、それが同梱されたバージョンの Studio とのみ動作可能であるため、これを新しいバージョンの Studio に配置しないこと。誤動作の原因となる。 なお v2018.3以降に同梱の Core アクティビティについては、v2018.3以降の任意のバージョンの Studio で使用可能。</p>	<p>退避した .nupkg ファイルを、製品インストールディレクトリ配下の同じディレクトリにコピーする。</p> <p>注: 新しいバージョンの製品に同梱の .nupkg ファイルを削除しないように、フォルダをまるごと置換するような操作は避けること。</p>
前バージョンの製品インストールディレクトリ配下の.configファイル	<ul style="list-style-type: none"><li>種々の設定ファイル。</li><li>手動で変更していなければ、バックアップは不要。</li></ul>	<p>&lt;製品インストールディレクトリ&gt;¥*.config</p> <p>例: NLog.config, UiPath.Service.Host.exe.config, UiPath.Executor.exe.config など</p>	<p>既定から変更された部分 (差分)を、新しい .config ファイルに手動で反映。 注: 設定項目が追加されている可能性があるため、ファイルを上書きしないように注意。</p>

# 主な設定ファイル

インストール後に設定ファイルをご自身で変更しているケースは様々ですが、変更されている可能性のある設定ファイルをご紹介します。設定内容の退避と設定書き戻しの際にご参考ください。

ファイル名	配置場所	主な設定変更例
UiPath.Executor.exe.config UiPath.Service.Host.exe.config	製品のインストールディレクトリ	• プロキシ設定
NLog.config	製品のインストールディレクトリ	• ログの出力設定
license.config	製品のインストールディレクトリ	• ライセンスの設定

# その他の設定ファイル (NuGet.Config)

この他に、重要な設定ファイルとして NuGet.Config があります。これは、アクティビティパッケージのソースの場所を設定するファイルです。Studio と Robot は、それぞれ別の場所にあるふたつの NuGet.Config を参照します。アクティビティパッケージのソースの設定詳細は、「バージョンアップガイド アクティビティ編」で説明されておりますのでそちらをご覧ください。

ファイル名	配置場所	設定対象
NuGet.Config	製品のインストールディレクトリ 32bit OS : %ProgramFiles%¥UiPath¥Studio 64bit OS : %ProgramFiles(x86)%¥UiPath¥Studio	Studio/Robot (共有)
NuGet.Config	ユーザープロファイル配下の AppData %AppData%¥NuGet	Studio
NuGet.Config	システムプロファイル配下の AppData 32bit OS : C:¥Windows¥System32¥config¥systemprofile¥AppData¥Roaming¥NuGet 64bit OS : C:¥Windows¥SysWOW64¥config¥systemprofile¥AppData¥Roaming¥NuGet	Robot

# バックアップを推奨するファイル・フォルダ

ユーザーが作成したワークフロープロジェクトについてです。

項目	説明	ファイル・フォルダの場所	バージョンアップ後のアクション
ユーザー作成プロジェクトのソースファイル (project.json や *.xaml などを含む)	バージョンアップによって削除されることはないが、念のためバックアップを推奨  注: 右列には既定のフォルダを表示しているが、ここ以外にも任意の場所にプロジェクトを保存できることに注意	%UserProfile%\Documents\UiPath \<プロジェクトフォルダ>	(なし)
ユーザー作成プロジェクトをパブリッシュしてできたパッケージファイル (*.nupkg)	バージョンアップによって削除されることはなく、また上行に記載のプロジェクトのソースファイルがあればパブリッシュして再現可能だが、パブリッシュすると付与されるバージョン番号が新しくなるため、一元管理できるようにバックアップを推奨	%ProgramData%\UiPath\Packages \*.nupkg	(なし)

# インストーラの起動

UiPathStudio.msi を起動し、バージョンアップを実行します。  
v2018.3 以前のいずれのバージョンからでも、直接 v2019.10 へバージョンアップ可能です。

実行に際しては、ローカル管理者権限が必要となります。

- ローカルアクティビティフィードをインストール  
アクティビティパッケージファイルをインストールします。  
特段の事情がない限りは、インストールを選択して下さい。
- クライアントを自動でスタート  
選択すると、UiPath Robot Tray が Windows のスタートアップに追加されます。
- Java ブリッジ・Chrome 拡張機能・Citrix クライアント 拡張機能  
それぞれ、Java アプリ、Chrome、Citrix アプリを UiPath セレクターで操作できるようにするためのプラグインです。ここでインストールを選択しなくても、後で Studio のホーム -> ツールメニューから機能を追加できます。



# v2018.2 以前からの製品のバージョンアップ後に

UiPathStudio.msi で v2018.2 以前の製品をバージョンアップした後は、次の作業を完了する事で、既存ワークフローの安定稼働が期待できます。

- 退避しておいた、前バージョンに同梱のアクティビティパッケージファイル (UiPath.Excel.Activities.\*.nupkg など) の、UiPath.Core.Activities.\*.nupkg を除いた全てを %ProgramFiles%¥UiPath¥Studio¥Packages フォルダにコピーします。
- 必要に応じて、バックアップしておいた設定ファイルから必要なものを書き戻します。
- ロボットトレイを起動し、既存のワークフローパッケージを実行して、問題なく動作するか確認します。
- もしロボットトレイが赤く表示されている場合には、[Win+R]services.msc[enter] と入力し、起動したサービスウィンドウから UiPath Robot サービスを開始して問題を解消します。

\* : 既存ワークフローのマイグレーションに関しては、“バージョンアップのストラテジー” 文書で説明しておりますのでそちらをご覧ください。



# 補足: アクティビティ/ワークフローのパッケージファイル を格納するフォルダの構成

対象		v2016.2	v2017.1	v2018.1	v2018.2 以降
製品のインストールディレクトリ (以下、%InstallDir% と表記)		%ProgramFiles%¥UiPath Studio	%ProgramFiles%¥UiPath Platform	%ProgramFiles%¥UiPath¥Studio	
製品に同梱の アクティビティ パッケージ	ローカルソース*1 (.nupkg の配置場所)	%InstallDir%¥Packages			
	展開先*2	%ProgramData%¥UiPath¥Activities	%LocalAppData%¥UiPath¥Activities		%UserProfile%¥.nuget¥Packages
ユーザー作成の ワークフロー パッケージ	ローカルソース*3 (.nupkg の配置場所)	%ProgramData%¥UiPath¥Packages			
	展開先	%ProgramData%¥UiPath¥Projects			%UserProfile%¥.nuget¥Packages

\* : %LocalAppData% と %UserProfile% のフォルダはユーザーごとに異なることに注意

\*1 : 前述の通り、バージョンアップ時にバックアップと書き戻しが必要となるパッケージファイルを含むフォルダ

\*2 : 必要なアクティビティ/ワークフローパッケージが未展開である場合は、Robot がソースを検索して展開するため、バックアップの必要はない

\*3 : ワークフローのローカルパブリッシュ先。手動でワークフローパッケージファイル .nupkg を配置することも可能



バージョンアップ切り戻しの手順

# バージョンアップ切り戻し作業全体の流れ

バージョンアップ切り戻し作業の流れは、以下ようになります。

1. 新しいバージョンの製品をアンインストール
2. 以前のバージョンの製品をインストール
3. バックアップした内容をリストア
4. ライセンスをアクティベーション
5. 動作確認

ご質問	回答
Studio/Robot をバージョンアップするとき、前のバージョンをアンインストールしてから次のバージョンをインストールすべきか？	<p>いいえ。</p> <p>前のバージョンをアンインストールせず、そのまま新しいバージョンのインストーラを起動することによりバージョンアップして下さい。</p> <p>前のバージョンをアンインストールすると、本来引き継がれるはずの %ProgramData%UiPath 配下のユーザーワークフローパッケージファイルが消えてしまったり、その後新バージョンをインストールした際にライセンスのアクティベーションが再度必要になるなどの不都合が発生します。</p>
サイレントインストールは可能か？	<p>はい。</p> <p>.msi インストーラにサイレントインストールのコマンドラインオプションがあります。詳細は弊社の UiPath Studio ガイドをご参照下さい。</p> <p>ただし、バージョンアップの際には、前のバージョンの製品に同梱のアクティビティパッケージをバックアップして、これを新しいバージョンの製品の環境に書き戻せるように、サイレントバージョンアップのためのスクリプト (バッチファイルなど) をご準備下さい。</p>
Studio v2018.3 以降で既存プロジェクトを開くと自動でマイグレーション処理が実行されるが、既存プロジェクトを Robot v2018.3 以降で実行するためには、このマイグレーションと再パブリッシュは必要なのか？	<p>いいえ。</p> <p>このマイグレーションは、Studio v2018.3 以降で既存プロジェクトを修正したい場合にのみ必要です。既存のユーザーワークフローパッケージファイル (*.nupkg) は、そのまま Robot v2018.3 以降の環境で実行できます。</p>

以下に本説明の参考となる資料（最新版）へのリンクを示します。  
ご利用のバージョンに適した資料を参照してください。

- ハードウェア要件
  - Studio <https://studio.uipath.com/lang-ja/docs/hardware-requirements>
  - Robot <https://robot.uipath.com/lang-ja/docs/hardware-requirements>
- ソフトウェア要件
  - Studio <https://studio.uipath.com/lang-ja/docs/software-requirements>
  - Robot <https://robot.uipath.com/lang-ja/docs/software-requirements>
- サイレントインストールのためのコマンドラインパラメーター（スクリプト等で活用）
  - <https://studio.uipath.com/lang-ja/docs/msi-command-line-parameters>



Thank you!